

2023年9月3日 主日礼拝

説教題「天に名を記されている喜び」ルカ 10 章 17～24 節

主任牧師 加藤 誠

**「しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に記されていることを喜びなさい。」(ルカ10章20節)。**

主イエスは「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という呼びかけをもって「神の国の福音」を宣べ伝えられました。そして弟子たちを伝道に派遣する際しても繰り返し「神の国を宣べ伝えなさい」と言われています。ということは、私たちもまた神の国を宣べ伝えるようにと主イエスに招かれているのです。その「神の国の福音」とはどういうものなのでしょう。実は「神の国」という言葉は直訳で「神の支配」という意味であり、ユダヤ人たちが使っていた言葉です。当時、ユダヤはローマ帝国の支配下にあつて、拝みたくもないローマ皇帝の彫像を拝まされたり、さまざまな形での不当な抑圧を受けていたので、一日も早くローマの支配が終わって「神の支配」が来るようにと「神の国」の訪れを待ち望んでいたのです。つまり「神の国の到来」は「ローマ帝国の支配の終わり」を意味したのです。

そのようにユダヤの人たちが「神の国の到来」を今か今かと熱望していた時に、主イエスが「神の国は近づいた」と語り始めたので、ある人たちが「それはいつ来るんだ？」と尋ねると、主イエスはこう答えられました。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものではない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」(ルカ 17: 20-21)。人々に見える形でのローマ帝国の支配の終わりを考えていたのに対して、主イエスは「もう神の国はあなたたちのもつて来ている。あなたたちの間で始まっている！」と語られたのです。人々は首をかしげたことでしょう。「神の国がもう来ているって？目の前のローマの支配は一つも変わっていないじゃないか！」と。主イエスの言葉を私なりの理解で言い換えるところになります。「神の愛と正義は、見える形ではないけれど、すでにあなたたちの間に実現している。あなたたちがそれを受け取り、神の愛と正義を生き始めるとき、それはこの世界に広がっていくのだ」と。そして、主イエスご自身が「神の国の始まり」を告げる「最初の人」として私たちの間に生きてくださいました。主イエスと出会った人たちは「神の国」「神の愛」に触れて、その心と生き方を新たにされました。「神さまってこんなふうに僕たちのことを深く愛して共に歩んでくださっている。この世界には差別や偏見があふれ、争いやいじめが絶えないとしても、主イエスが手渡して下さって神さまの愛を大切に受け取って、顔を上げて生きていこう！」と、暗闇に覆われている世界の中にあつても神からいただく愛の光に心照らされて、新しい生き方をする人たちが起こされていったのです。そして、主イエスは「人々の間に出かけて行って、神の国を告げ、神の愛を生きて、分かち合う最初の人になりなさい」と弟子たちを宣教の働きに派遣されたのでした。

今朝、ご一緒に開いたルカ 10 章は主イエスが伝道に送りだした 72 人が帰って

きて報告をしている箇所です。派遣される時には「こんな自分に何ができるのだろうか？」と不安に思っていた 72 人でしたが、「お名前を使うと悪霊さえも屈服します」と喜びの報告をしたのでした。すると主イエスは言われます。「悪霊があなたがたに服従するからといって喜ぶな。むしろあなたがたの名が天に記されていることを喜びなさい」と。どうして主イエスはこのような注意をされたのでしょうか。

一つは「高ぶるな！」という意味の戒めであったことでしょう。直後の主イエスの祈りで語られているように、主イエスの弟子は「幼子である自分」を忘れてはならないのです。何ごとか神さまの手伝いをできたとしても、自分の知恵や力を誇ってはならない。どんな小さな働きもどんなに大きな奇跡も、すべては神さまの慈しみの働きであって、自分の力でなし遂げたことではない。だから常に神の前に「幼子として」神をほめたたえる賛美を忘れてはならない…ということでしょう。

もう一つは「この世界は、いつも祈りがかなえられる場所ではない。世界を覆っている人間の罪は深く、悪の力はすさまじい。あなたたちがどんなに祈っても祈ってもかなえられない時がある。勘違いするな！」という意味の戒めが込められた言葉だと受け止めます。今回は弟子たちの祈りは次から次へとかなえられた。けれども世界を覆う暗闇は手ごわいのです。弟子たちが祈っても祈っても、見える形で祈りがかなえられない時がある。自分の信仰の無力さを思い知らされる時がある。そのように神さまの愛がまったく見えない時にも大丈夫。わたしの十字架を見なさい。暗闇の中にも決して消えることのない神の愛を示すために、わたしは来た。だから、どんな暗闇においても「神の国の始まり」を告げる信仰をもって、この世界の中で苦闘し、苦悩している人たちと共に歩みなさいと、弟子たちを励ますために、主イエスは敢えてこの厳しい言葉を語られたのではないかと思うのです。

日本のサッカーの J リーグで活躍している鈴木武蔵選手が自分の半生を語っている記事を読みました。武蔵選手はジャマイカ人の父と日本人の母をもち、日本代表にも選ばれたことがある選手です。6 歳で両親が別居し、母と弟と一緒に日本に来て、群馬で暮らし始めましたが、肌の色や髪質が違うということで同級生から「ハンバーグ」などと言われ、いじめられたそうです。街中を歩けば「黒い」と指をさされ、お母さんの陰に隠れていた。肌を白くしたいとベビーパウダーを塗ったけれども、シャワーを浴びると元通り。白く濁って流れる水を見て悲しみが大きくなった。しかしその武蔵選手の傍らには「そのままのむっちゃん大好き」と言ってくれるお母さんがいて、そしてサッカーをするようになると自分を認めてくれる仲間が増え、「あいつ黒くない？」と心無い言葉を口にする対戦相手から自分を守ってくれるチームメイトに支えられて、世界が変わっていったと語っていました。

この武蔵選手の話の聞くときに、肌の色だけで人を見て、差別し排除する私たち自身の罪深さ、愛の貧しさを考えさせられます。少しは多様性にかかれるようになったと言っても、本質的にはほとんど何も変わらない私たちの姿がそこに厳しく示されています。しかしその小さな者たちが、今日、この国の中で「神の国の訪れ」を告げる働きに主イエスの祈りによって招かれていることを覚えてほしいのです。